
孤独からの救い

JUN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独からの救い

【Nコード】

N7538A

【作者名】

JUN

【あらすじ】

ある高2の夏。俺はばあちゃんの家がある田舎で一人の少女に出会った……

第一話 ハッスルおばあちゃん!? (前書き)

初出筆です。初心者ですのでいろいろとコメントをよろしく願います。

第一話 ハッスルおばあちゃん！？

ある高2の夏。

太陽がサンサンと輝く昼時。

俺、もりがみじゅん森神潤はばあちゃんの家に向かっていた。

今は夏休みでお盆。

なので墓参りというわけだ。

うちの両親は出張やら何やらで来れないので俺が代わりにやった。

そんなこんなで電車を乗り継ぎ、駅に降り立つ。

そこから10分ほどのところにはあちゃんの家が建っている。

さて、そうこうしている内にはあちゃんの家の前まで来ていた。

ピンポン。

呼び鈴を鳴らしてみるが応答無し。

ピンポン。

2回目もやはり応答無し。

ここまでくるとヤケになるのが俺の性分。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピン……、

「やかましゃー！ー！ー！ー！」

ドゴオン！ー！ー！

「ぐぼあ！ー！ー！？」

突然、玄関のドアが突き破って俺をぶっ飛ばし、後ろの扉に体をぶつける。

「おやおや、潤じゃないか。待つてたんだよ。早くお上がり。」

「おいコラ、ババア！ー！ー！軽やかにスルーすんな！」

「知らん。あんたが避けないのが悪い。」

「んな、むちゃくちゃな……。」

俺はここに来る度にはあちゃんの異常な行動で毎度、毎度疲れていた。

「それよりも、さつさと線香あげてきな」

「ああ、そうするよ。」

……………。

チーン。

俺はここにくる度に思うことがある。

じいちゃん！ー！何ではあちゃんと一緒になったんだ！ー！

あれは既に人としてヤバい域にまで達している。

ある意味神、それも悪魔神……、

スチャ！

「じゅ〜ん？何を考えてたのかなあ？」

「イイエ、ナニモ。ナニモカンガエテナンカ、オリマセンヨ、オバアサマ。」

「本当に？」

「本当だから、その包丁おろしてくんない？」

そして、ばあちゃんはゆっくりと包丁を降ろした。

ふう、助かった。

「まあいいわ。それよりも掃除がまだかかりそうだから外に散歩にでも行っておいで。」

「ああ、まあそうだな。久しぶりだし、そうするか。」

そして俺は懐かしいこの村を散歩することにした。

この後の出会いで自分の人生が大きく変わることも知らずに……。

第二話 孤独な少女

ミンミンミンミン……

あ、暑い……暑くて死にそうや……

何でこんなに暑いのですカッ!!

と、本気で太陽に殺意を芽生えさせているところにふと、公園が目に入った。

「ち、ちよつと休も……ぷりーず ぎぶ みい とう ざ
ヴェンチ……」

ヨロヨロとまるでキノシの如くさ迷い歩くと念願のベンチを見付けたがどうやら先客がいるようだ。

白いワンピースに麦わら帽子、見たところどうやら女の子のようだ。

少しの間、何故か俺はぼーっとその女の子を見ていた。

あ、こっち向いた。

立ち上がった。

倒れた……って

「なにぃー！！！！？」

おうおう、姉ちゃん。人の顔見て倒れるたあ、どついう了見だ、ああ？

駄目だ、暑さで俺の脳やられてるわ。

一度頭を振って正常に戻すと俺は急いで女の子に駆け寄った。

「おい、大丈夫か！？おい！！」

う、近くで見るとかなり可愛いじゃないか・・・

滴る汗、苦しそうな呼吸、そして何より標準より遥かにでかいその胸。

はあはあ・・・うっわ、やっべ、超変態思考モード入ってっから俺！！

「あー、もう！ちょっと悪いー！！」

俺はその女の子を背負って急いではあちゃんちに向かった。

ああ・・・背中当たるやわい二つの巨塔・・・

「ええい！しっかりしろい、俺！！ナムアミダブツナムアミダブツ・
・・・」

俺は常に襲いかかるまっピンクの思考を念仏を呟きながら抑え込んだ。

そうこうしているうちに、何とかばあちゃんちにたどり着いた。

「ばあちゃん！ちょっと来てくれー！！」

「何だい、いったい？あたしゃ今いそ．．．がし．．．」

ばあちゃんが俺を見て固まる。

正確には俺が背負っている一人の女の子を見ているのだが。

「潤．．．あんた、まさか．．．」

ばあちゃんは驚愕の表情を浮かべたまま口を開いた。

第三話 孤独な少女 ↓天然ボケボケ娘！？

「あんた、いくら女に餓えてるからって誘拐は犯罪……。」

「ちがーう！！俺はただこの女の子が突然倒れたから連れてきただけ……！」

「たたく、なんつーことを言うかな、このばばあは。」

「それよりもばあちゃん、この子見てくれよ！」

「こう見えてもこのオババ、昔は看護婦やってたらしい。」

「あゝこりゃ軽い日射病だね。少し休んでればすぐよくなるよ。」

女の子を布団に寝かせてばあちゃんは言った。

「そっか。良かった。」

俺は安堵のため息をつき座り込んだ。

「じゃああたしはこれから三味線の稽古があるからあとは任せたよ。」

「なぬ！？」

「ハア？ちよつと待つてよ！この子どうすんだよ！」

「そんなん、あんたが看病するに決まっているでしょう。じゃ、行ってくるね。」

「あ、ちよつ……。」

行っちゃった。

男と女を2人つきりにするかね、普通。

女の子の顔を盗み見る。平和そうな顔してんね。ハッ、これって男としてはナイスなシチュエーションか！？イヤイヤ、寝込みを襲うなんて無粋なことはいけませんよ。決してしませんよ、ええ！

コラ、誰だ。今、俺をヘタレとかいったやつは！

そうして俺の中で内乱が起こっているとき、

「ん、うつん……。」

女の子が起き上がって辺りを見回していた。

「あれ？私、どうしたんだろ？それにここは…？」

「おう、目えさました？」

女の子が俺を見て言った。

「あなたはどなたですか？ハッ、もしかして誘拐さんですか！？私はお金も何ももってません！許して下さい！」

「アホか！俺はただあんたが倒れたから連れてきただけだ！」

けっこう失礼だなこの娘。

「すみません、許して下さい。」

きいてねえし。

そんなこの人にデコピンスタンバイ！

「人の話を…。」

中指と親指に力を入れる。

「きけ！！！」

ピン！！

バシ！！！

「あっ！うううう。」

女の子は額を押さえてうずくまった。

「アナタタオレタカラ、ワタシツレテキタ。ワカタ？」

「うううう。はい。」

涙目になりながら答える。ちょっと強すぎたか？

「あつと、自己紹介がまだだったな。俺は森神潤。十七歳、高二だ。」

「あ、私は久代春奈くごはるなです。十七歳で、高校二年生です。」

同じ年か……。

「久代さんね。よろしく。」

「春奈でいいですよ。」

「じゃあ俺も名前でいいよ。あと敬語は使わなくていい。」
「うん、わかった。潤君。」

（ 第四話へ続く ）

第四話 春奈VSばあちゃん 仁義なき昼飯の戦い（前書き）

ちょっと改行を多く使ってみました。どうぞじっくりご覧ください。

第四話 春奈VSばあちゃん 仁義なき昼飯の戦い

「で、何であんなところで日射病になるまでぼくとしてたんだ？」

春奈の体調が一通り回復してから俺は尋ねた。

「ぼくとしてたわけじゃないよ。ちょっと空を見てただけだよ。」

「

ぼくとしてたんじゃないか…。

「空？なして空見てたんだ？」

そっぴや俺が最初に見たとき空を見てたな。

「あ、うん、ちょっと考え事してただけ……。」

春奈が一瞬だけ悲しそうに目を伏せる。

似ている……昔のあいつに……。

「つと、じゃあ私、もう帰るね。助けてくれてありがとう。」

「まてまて、せつかくだ。昼飯でも食ってけ。」

俺は何故か、一瞬だけ悲しそうに目を伏せたこの少女をそのままほうっておけなかった。

「へ？でも迷惑じゃ……。」

「なわけないだろ。誘ってんのは俺だぞ。」

春奈はしばし考えて、

「うん！じゃあご馳走になる！」

春奈は満面の笑みを浮かべる。
うつ、かわいい。

……。

「潤君？」

……ハッ！

「イヤイヤ、ナンデモナイスヨ。」

い、いかん。むっちゃどもっとる。

「？」

春奈の方を見たら首を傾げている。

うつ、その姿もかわいいッス。

……ハッ。

あかん、これじゃ無限ループや。

そんなとき、

「ただいま。」

ナイスタイミングだ、ばあちゃん！

「あ、ばあちゃん帰ってきた。」

.....。

「そっか、春奈ちゃんていうんだ。よろしくね。」
「はい！よろしくお願いします。」

春奈とばあちゃんが楽しそうに話をしている。

俺はというと、

トントントントン。グツグツグツ。

昼飯を作っている。あのオババは家に料理を作れる人がいると利用する。

まったく、久々に孫が来たんだから自分で作ってもいいだろーに、これだからあのオバ.....。

「潤！まだかい！？」

「あーハイハイ。いまもってくよ。」

ふう、まあいいか。

.....。

「あー！幸さんひどいですー。そのエビフライ、私が食べようとしてたのにー。」

「ふっふっふっ、所詮この世は弱肉強食。強い者が勝つのだよ！」

今、俺の目の前でなんとも低レベルな戦いが繰り広げられている。

言い忘れていたがばあちゃんの名前は森神幸^{もりがみさち}という。

キーン！カキーン！

春奈の箸とばあちゃんの箸が空中でぶつかりあっている。

しかし、春奈もばあちゃんとタメをはるとはなかなかやるなあ。

と、静かに傍観していると

「あー！またとられたー！」

「ハーハッハ。あたしに勝とうなんざ33年はやいわー」

微妙に現実的な数字だな、オイ。

「うう~~~~。」

春奈は春奈で唸ってるし。

「ハア、ほら俺のやるから、これで我慢しろ。」

俺は仕方なくエビフライを春奈の皿の上におく。

「わあ！いいの？ありがとー！」

春奈は嬉しそうにエビフライをほおばっている。

ばあちゃんはニヤニヤしながら俺を見ている。

「何だよ。」

「いんやゝ。いいねゝゝ、青春だねゝゝ。」

何をいうとるかこのばあは。

多少疲れるもののこの状況を楽しんでいる自分がいることに気づいた。

（第五話へ続く）

第五話 春奈の闇

昼飯を終えた俺と春奈は散歩に出かけた。

春奈は助けてくれたお礼に散歩の途中だった俺を案内すると言いだした。

春奈はいくところ、いくところハイテンションで案内される側が疲れるくらいだった。

そして最後に行き着いたのが春奈が倒れた公園だった。

「はい、最後が私の一番お気に入りの公園です。」

「ああ、春奈がボケっとして倒れた公園ね。」

「も、もうその話はいいいよう。」

春奈が少し涙ぐみながら抗議してくる。

「あゝ悪かった、悪かった。ホラ、そのクレープおごってやるからさ。」

「も、物にはつられないもん!」

オイオイ、そういいながら目がクレープ屋の方ずっと見てるぞ。

「そっか。春奈はクレープ入らないのか。じゃ、俺の分だけ買ってくつかな。」

わざと意地悪な言い方をしてみると

「ふえ!??ううう。潤君の意地悪…。」

「さ、機嫌直すか、意地はるか、どっちにする？」

俺は笑いをこらえながら聞いてみた。

「ううう。買って……。」

春奈は悔しそうに上目遣いで睨んできた。

フ、全然怖くないな。

「りょくかい！それじゃ、行こう！」

「うん……。」

春奈はまだ不服そうにしていた。

……。

「おいしー！」

春奈は幸せそうにクレープをほおばっている。

まんまと物につられてんじゃねえか……。

「美味しいね！潤君。」「ん？ああ……そうだな……。」

俺は春奈がクレープを食べているのを眺めながら答えた。

………そういえば、アイツともこうやってクレープを食ったりしてたっけな……。

春奈を眺めながらそんなことを思っていると、

「あ、オイ春奈。」

「なに〜?」

「鼻にクリームついてんぞ。」

子供かこいつは…。

「ふえ!どこどこ!?」

鼻についたクリームを取ろうとしているがとりきれてない。

「しゃーないな。」

俺は仕方なくティッシュで春奈の鼻をふいてやる。

「ホラ、取れた。」

「あ、ありがとう……………」

春奈は少し照れくさそうにお礼を言った。

「ハア、お前と一緒にいると出来の悪い妹といるみたいだな。」

「アハ、潤君がお兄ちゃんなら私は嬉しいな。」

「ハイハイ、そうですかい。」

……………。

しばらくそのまま話していたら時計の針が五時を指していた。

「さつてと、そろそろ晩飯の用意をしなきゃな。ばあちゃんが暴れ出しちゃう。」

「あ、もうそんな時間？」

「ああ、お前もそろそろ帰んねえと親が心配するぞ。」

「う、うん。そうだね…。」

春奈の顔が一瞬曇った。

「？どうかしたのか？」

「う、うん。何でもない。あ、ねえ、もし良かったらでいいんだけど、明日も潤君家に遊びに行ってもいい？」

春奈は不安そうに聞いてきた。

何でそんな不安そうにするんだよ…。

「あ、ああ。俺は別に構わねえよ。どうせ夏休み中はこっちにいるし、やることもじいちゃん墓参りくらいしかねえし。」

春奈の不安そうな顔を見てしまったらこう言うしかなかった。

「やった！じゃあ明日も遊びに行くね！」

「ああ。それじゃ、また明日な。」

「うん！バイバーイ！」

春奈は嬉しそうに走って帰って行った。それにしても、何で春奈はあんな不安そうにしてたんだ？

まあ最後は嬉しそうにしてたから大丈夫だろう。

このとき、俺はまだ気づけていなかったんだ。
春奈の心の中の闇に…。

（第六話へ続く）

第六話 夏祭り

「ふあゝあ。暇だなあ。」

朝飯を食い終わったあと俺は縁側でマッタリとしていた。

ばあちゃんは今度は日本舞踊の稽古で出かけている。

「そついや春奈は何時にくるんだっけ？」

昨日、何時くらいにくんのか聞くの忘れたんだよなあ。

「まあいいか。そのうちくるだろう。よし！それまで寝ていよう。
うん！そうしよう。」

1人で言って1人で納得して、そのまま俺は深い眠りに落ちていった。

……………。

ん？俺抱き枕なんて持つてきてたっけかな？

まあいいか。寝よ寝よ。

そつ思い、抱き枕を強く抱きしめると、

ん？今この抱き枕動かなかったか？

そつ思つて目を開けると、

「ん？ハア！？あああああああ！！？？」

そこにはなぜか、顔を赤らめながら俺の顔を眺めている春奈がいた。

「もう、潤君たら朝から大胆なんだから」

「何で！？なぜ！？なにゆえ！？Why！！」

俺の頭の中はすでにパニック状態になっていた。

「何でって、潤君が抱きついてきたんだよ。」

「ち、ちちちちちよつと待て。その辺を簡潔に説明してくれ！」

「えつとね。確か……」

——20分前——

「潤君、おきてるかな」

私は今、潤君（正確には幸さん）の家の前に来ている。

ピンポン。

……。

あれ？いないのかな？

ピンポン。

……。

やっぱりいないのかな？
裏に回ってみよ。

「あゝ。潤君寝てる。」

私は起こさないようにそつと家上がった。

ふふ。平和そうに寝てる。

私も潤君と同じように寝そべって、寝顔を眺めていた。

……。

しばらくそのまましていると、潤君の手が私に伸びてきた。

「あ、あれ？ち、ちよつと潤君！？」

潤君の手が私の背中に回されたかと思うと、そのまま抱き枕みたい
にされてしまった。

「潤君……。」

しばらくすがままにされていると、

あ、起きた。

……。

「ってなわけです。」

「いや、ってなわけですから、お前、俺が抱きついた時のリアクシ
ョンおかしいだろ。」

「だってあつたかくつて気持ち良かったんだもん。」
「いや、離れるか悲鳴あげたりするだろ普通。ハア、朝っぱらから疲れる。」

俺はため息をつき、立ち上がった。

「あれ？どっか行くの？」

「ああ、お前も一応客だしな。麦茶でもいれてくる。外は暑かったろ？」

「ありがとう。でも私寒がりだからそんなに暑くなかったよ。」

「そうかい。ま、俺ものが渴いたからついでにもってくるよ。」

それからしばらくは麦茶を飲みながら縁側で春奈と話をしていた。

「あ、そういうば今日神社でお祭りがあるみたいだよ。」

突然春奈が思い出したように言った。

「ふ〜ん。祭りねえ。」

多分、こいつのことだから一緒に行こうとか言っただろうなあ。

あれ？何で俺、会って1日しか経ってないのに分かるんだろ？

まあこいつが分かりやすいからだな。

「でね！お祭り一緒に行こう！」

やっぱりな……。

「祭りかあ……。」

はつきりいつて人ごみは嫌いなんだよなあ。

俺って、春奈のこの希望に満ちた目に弱いみたいだなあ……。ハア……。

「わかった。わかったから。」

結局、俺が折れる。

「ホント！？やった♪」

俺と行くのがそんなに嬉しいかね……。あれ？そういえばこいつ、何で昨日知り合ったばかりの俺を誘ったんだ？

もしかして、

「なあ、春奈。」

俺は祭りのことをいろいろと説明している春奈に聞いた。

「ん？なあに？」

「お前、もしかして……。いや、すまん、何でもない。」

「な〜に〜？途中で止めないですよ。」

「あ、いや、定番のリング飴とかわたあめはちゃんとあんのか？」

俺はとっさに思いついたことを言った。

「そりゃあ、定番中の定番だからあると思うよ。」

「そつか、そりゃ良かった。やはりあれがないと祭りとはいえんかな。」

「あはは、なにそれ。」

……やっぱ聞けるわけないよな。

友達いないのか？なんて……。

……。

あのと春奈はいったん家へ帰った。
なんでも、浴衣を着てくるらしい。

春奈曰く

「かわいすぎて、悩殺なんだから。」
らしい……。

男の俺は時間もかからないので先に待ち合わせ場所の公園に来ていた。

祭りの開始時刻は6時。

現在の時刻は6時、10分前。

そろそろかな……。

っと思っていると、

「潤くん！」

「おう。来たか、はる……な。」

そこには、全体にピンクの花柄を使っているが決して派手すぎず、春奈によく似合っていた。春奈は少し化粧していて、肩まで黒

髪も結び上げている。

不覚にも少し見とれてしまった。

「ねえねえ、潤君。どう？どう？」

「あゝ馬子にも衣装。」

俺はつい照れくさくてそんなことを言ってしまった。

「あ、ひどい。」

春奈は少しむくれて俺を睨んできた。

「ハハ、すまん、すまん。大丈夫、すごく似合ってるから。」

とりあえず正直に言ってみる。

「え！ホント！？ありがとう！」

今度は嬉しそうにしていた。

ホントに喜怒哀楽が激しいな、春奈は。

「さて、行くか。」

「うん！」

そして俺は歩き出して、春奈も俺の横に並と、突然腕を組んできた。

「お、おい！春奈！」

「せっかくのお祭りなんだから気にしない、気にしない。」
そういう春奈の顔も真っ赤だった。

「ほら、いこ！」

そのまま春奈に連れてかれた。

.....。

それからしばらくは2人でいろんな出店を回った。

春奈は焼きそば食べたり、リンゴ飴食べたり、わたあめ食べたり、いかやき食べたり、e t c...。

「そ、そんなに食べたりしてないよ。」

「なにを言う。もっと食ってたろう。」

「う、だってどれもおいしそうだったんだもん。」

「太るぞ。(ボソ)」

俺は静かにつぶやいた。

「う、うう~~~~。もういいもん。」

春奈は怒って先行ってしまった。

「お、おい！人が多いんだから先に行くな！」

しかし春奈は見えなくなってしまった。

「くそ！」

.....。

まったく潤君はデリカシーのかけらもないんだから。

そりゃあ、いっぱい食べたりしたけど、もうちょっと言い方があると思うし、それに…。

あ、あれ？潤君がいない。

「潤君！ねえ、どこ？」

そのとき、突然肩をたたかれた。

「あ、潤く…。だ、誰ですか！」

振り向いたら知らない男の人が2人立っていた。

「なあ、彼女お、1人？」

「良かったら俺たちと遊ばない？」

と、ナンパにはありがちなことをいつてきた。

「ご、ごめんなさい。私、連れがいるので…。」

そう言って立ち去ろうとすると、突然腕をつかまれた。

「い、痛！離してください！」

「ちょっとくらい遊んでくれたっていいだろうが！」

そう言って男は無理やり連れてこうとする。

もうすでに私は半泣きになっていた。

や、やだ！助けて！潤君！！！！

すると、突然腕をはなされた。

「い、いつて！はなせ、コラ！」

どうやら、誰かが男の腕をつかんで私の腕をはなせたみたいだ。

そこにいたのは、潤君だった。

「なあ、彼女お、1人？」

「良かったら俺たちと遊ばない？」

と、ナンパにはありがちなことをいつてきた。

「ご、ごめんなさい。私、連れがいるので…。」

そう言って立ち去ろうとすると、突然腕をつかまれた。

「い、痛！離してください！」

「ちょっとくらい遊んでくれたっていいだろうが！」

そう言っつて男は無理やり連れてこうとする。

もうすでに私は半泣きになっていた。

「や、やだ！助けて！潤君！！！！」

すると、突然腕をはなされた。

「い、いつて！はなせ、コラ！」

どうやら、誰かが男の腕をつかんで私の腕をはなせたみたいだ。

そこにいたのは、潤君だった。

でも、いつもの優しい目をした潤君じゃなくて、見ただけで震え上がってしまいそうな冷たい目をしていた潤君だった。

……………。

春奈の悲鳴が聞こえて、来てみたら男2人に連れていかれそうなところだった。

俺はすぐ、春奈の腕をつかんでいる男の腕をつかんでなかせた。

「い、いつて！はなせ、コラ！」

春奈の方を見ると怪我はしてないみたいだ。良かった。

だが、怯えた表情で俺を見上げている。

仕方ないか、さっきの光景をみて昔の俺が息を吹き返しちまったみたいだし。

あいつのことを守りきれなかった俺が…。

俺はつかんでいた男をもう1人の男の方に突き飛ばした。

「ぐあ！」

男2人が一緒になって倒れた。

「おい、てめえら。今ここで死ぬか、さっさとここから消えるか、どっちか選べ。」

ものすごくドスのきいた声で言うと、

「ひ、ひiiiiiii!」

とか言いながら逃げていった。

「潤君……。」

「春奈……。」

春奈はさっきと同じように怯えた表情で俺を見ていた。

く、俺はこんなに怯えた表情を春奈にさせているのか。

そう思ったら春奈の顔を見れなかった。

つくづく、自分が嫌になった。

「ごめんな、春奈。」

怖い思いをさせてしまって……。

「あ！潤君！待って！」

そう呼ばれたが、俺は振り向けなかった。

俺は走って帰っていった。

（第七話へ続く）

第七話 最後の日

潤君が行ってしまった後、私は神社の裏手で一人で泣いていた。

「ふええん、ひつく、う、え、うく、ふええ。」

どうしてあのとき私はすぐ近寄ってあげがとうと言えなかったのだろう？

どうして私は助けてくれた潤君を見て怯えたままだったのだろうか？

どうして私は……。

考え始めたら、自分を責めることしかできなかった。

潤君は孤独だった私を救ってくれた。

私の初めての友達になってくれたのに。

「ふええん、うぐ、ひつく、ふええ……。」

潤君、ごめんなさい……。

……。

俺は帰った後、すぐ自分の部屋に閉じこもった。

「やれやれ、何があつたか知らないけど、春奈ちゃんとは仲直りしなきゃだめだよ。」

そう言つてばあちゃんは部屋の前から立ち去つた。

分かつてる。そんなことは分かつてるけど。

初めて春奈と話したとき、どことなくあいつに似ていると思つていた。

俺が守りきれなかったあいつに…。

だからだろう。会つて間もないのに俺が守ろうと決めたのは。

だから今度こそ短い間でも守つて行こうと決めたのに……。

「怯えさせてどうすんだよ…。」

俺はものすごく自己嫌惡にかられた。

……………。

あれから一週間。

俺はもう明日帰ることになっている。

春奈とはあれから何の音沙汰もない。

当然か…。俺はもう春奈とは会えないんだろうな…。

さてと、もうこの景色も見納めだからな。散歩でもしてくるか。

……………。

俺は春奈と一緒に歩いた村をもう一度見て歩いた。

春奈って俺の中でこんなに大きくなってたんだな。

それが春奈自身としてなのか、あいつと似ているからなのかはわからんが。

最後にさようならくらいは言いたかったかな……。

そして最後に1番思い出に残っている公園に来た。

ここで春奈と出会ったんだよな。

あのベンチの近くであんな感じで春奈がボケッと突っ立って……………。

「って！春奈！？」

そこには春奈が初めて会ったときと同じように空を眺めながら立っていた。

あ、こっち見た。

倒れた。

…………… って！？

「デジャヴ！？」

俺は急いで春奈に駆け寄った。

「お、おい！春奈！またかよ！」

.....。

俺はあの後春奈を背負って前と同じように布団に寝かせた。

「ん、うつん...。」

春奈が目を覚ましたようだ。

「春奈。目え覚ましたか？」

「ふええ！？誘拐です.....。」

「そのネタはもういいっつの！」

「たく、寝ぼけてんのか？」

「あ、あれ？潤君？」

「おう、そうだぞ。」

あれ？春奈が俯いてプルプル震えてる。
何だ？

「潤くん！！！」

「おわ！！！」

突然春奈が抱きついてきた。

「お、おいはる...。」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

突然抱きついてきたと思ったら、今度は泣きながら謝ってきた。

「お、おいどうしたんだよ。」

俺出来るだけ優しく聞いた。

「うう、ぐす、ごめ、んね、助けて、くれたのに、ふええ、お礼、も言えず、に、潤君の、こと、怖がっちゃ、って。」

春奈が途切れ途切れに分けを話してきた。

俺は春奈の頭を優しく撫でた。

「大丈夫だ。俺は最初から怒っちゃいない。逆に俺が春奈に怖い思いをさせちまってごめんな。」

「ううん！確かにちよつと怖かったけど嬉しかったから！」

「そか。じゃあ仲直りだな。」

「うん！」

涙で濡れた春奈の笑顔はいままでで一番輝いていた。

.....。

「え~~~~！潤君明日帰っちゃうの~~~~！」

「ああ...。」

俺は明日には帰ることを春奈に伝えた。

「だから、その見納めに散歩してたんだし...。」

「.....。」

春奈はまた泣きそうになっている。

「ごめんな。もう夏休みも終わっちゃうし。」

春奈は何かを考えている感じで俯いていて、やがて決心したように顔を上げた。

「じゃあ、最後の思い出にさっきの公園に行こうよ!」

「ああ、そうだな。」

……。

俺達はまたさっきの公園に来ていた。

「……………」

「……………」

2人ともここに来るまで終始無言だった。

そしてベンチの近くまで来て、春奈は立ち止まった。

「私ね、ここに来て空を眺めているときはいつも神様にお願いするの。」

「何を願うんだ?」

突然口を開いた春奈に俺は疑問を返した。

「孤独はもうヤダ。誰か私に気づいてって。」

「え?」

その言葉に俺は一瞬理解できなかった。

「私ね、小さい頃にお父さんとお母さん、亡くしていまは叔母さんの家に住まわせてもらってるの。」

「……………」

俺は無言で春奈を見つめた。

「私、生まれたときから病弱で入退院を繰り返してたんだ。」
「……………」

いまはもうすっかり良くなったんだけどね、と春奈は言った。

「小学生と中学生のときも入退院を繰り返してたから高校に上がったも周りは知らない人ばかり。それに叔母さんも私のことを良く思っていないみたいだし。それから１年間ほとんど誰とも話さなかったの。」

「そうだったのか…。」

友達がいなくてという予想は当たってたのか。

俺には春奈の苦しみがどれほどのものか分からなかったが、凄く悲しい人生だったんだな。

「でね、ここからが本題なんだけど…。」

春奈は顔を赤らめながら言った。

「私の人生ね、この夏休みで大きく変わったんだよ。」

「？」

「潤君が…変えてくれたんだよ…」

「俺…が？」

俺は春奈の人生を変えるような大それたことはしてない気がするんだが…。

「潤君があのと私に気づいて、助けてくれたとき、ああ、やっと私に気づいてくれる人がいたって思ったんだ。そのとき凄く嬉しかったんだよ。」

「そうなのか…。」

普通に話すことが春奈にとっては凄く嬉しいことだったんだな。

「あの…それでね、潤君…。」

「ん？」

春奈の顔を見てみたら真っ赤になっていた。

春奈は数回深呼吸をして俺の目を真っ直ぐ見た。

「私は…ね。私を孤独から救ってくれた潤君が…好き…」

「へ？」

俺はそのとき間抜けな声しか出てこなかった。

「私の人生に光を照らしてくれた潤君が好き…。大好き…」

「……………」

春奈…………。

「潤君…。私と…付き合ってください！」

春奈はバツと勢いよく頭を下げた。

そのときあいつが脳裏をかすめた。

……美咲^{みさき}、俺、どうすればいいだろう。

（第八話へ続く）

最終話 春奈の勇氣、潤の決意

春奈から告白されて少したっただろうか……。

その間春奈はずっと真っ赤な顔でただ、ただ俺を見つめ続けていた。

そして俺は、

「春奈。」

「は、はい！」

春奈はかなり緊張しているみたいだった。

「俺はな、春奈の事は嫌いじゃない。でもな、俺はもう大切な人を持つのが怖いんだ。また俺から離れていってしまうんじゃないかと思うと怖くて仕方ないんだ。」

「潤君……。」

俺は卑怯だな……。春奈につらい思いをさせようとして……。。

「……だから、待っていて欲しい。俺が答えを出せるまで。必ずここに帰ってくる。1年後の俺達が出会った日、出会った場所で。」

「本当に？本当に帰って来てくれる？」

春奈はとうとう泣きながら俺に言ってきた。

「ああ。約束だ。必ず帰ってくる。」

俺がそう言つと、春奈は満足そうに笑つた。

「じゃあ、指切りしよ。潤君は必ず帰ってくるっていう事を、私はずっと待ち続ける事を。」

「ああ、そうだな。」

俺はそのときだけは、春奈の要求を快く受けた。

♪ゆゝびきゝりげゝんまゝん、うゝそつゝいたゝらはゝりせゝんぼ
ゝんのゝます♪ゆゝびきつた♪

……………。

それから俺達は暗くなるまでずっと一緒にいた。

ずっと語らい、笑いあつて、話題がなくなつて沈黙しても気まずい
雰囲気はなかった。

沈黙してから春奈は俺の肩に頭を預けて、俺は春奈の頭を撫でてい
た。

突然春奈が提案して成り行きでこうなつてしまった。

お願いされたからつてやつてしまふとは……。ハア、春奈には弱い
なあ、俺。

「……春奈、もう帰つて明日の準備の準備しないと。」

「……もう少し……。」

「なあ、これでそのセリフもう17回目だぞ。」

俺が呆れた溜め息を吐くと、

「本当は、あの家に帰りたくない。潤君がいなくなって、また孤独になると思うと……。」

「春奈……。」

俺は頭を撫でていた手を離して、春奈を強く抱きしめた。

「あ、潤君……。」

春奈が恥ずかしそうに上目遣いで俺を見上げてきた。

「春奈はもう1人じゃないだろ。ばあちゃんだっているし、寂しかったら俺に電話とか手紙を書けばいい。」

「うん……。」

「春奈はもう孤独だった頃の春奈じゃない。大丈夫、春奈は大丈夫だ。」「うん……、分かった……。」

春奈はそう言ってゆっくり俺から離れて立ち上がった。

そして俺の方に振り返って、

「じゃあ、今日はもう帰るね！明日は絶対見送りに行くからね！」

春奈はまぶしいくらい笑顔で俺に言った。

「ああ。じゃあ、また明日。」

「うん！また明日ね！」

そうして春奈は走って帰っていった。

春奈は強いな……。

俺は春奈に好きになってもらう資格なんてあるんだろうか。

なあ、美咲。俺はお前を守りきれなかった……。

そんな俺が春奈を好きになってもいいんだろうか……。

俺はしばらくベンチに座って考えていた……。

……。

チュン、チュン。

小鳥のさえずりが聞こえてくる。

「朝か……。」

俺はあの後しばらく考えていたが、答えは出ず、ばあちゃん家に帰っていつも通りに過ごした。

さてと、さっさと朝飯でも食つか。

朝飯はばあちゃんが作っている。年なのか朝が早いみたいだ。

……んな事、本人に言ったら殺されそうだが。

着替えて下に降りて行った。

「おはよ、潤。」

「ああ、おはよ。」

すでに朝飯を作り終えてはこんでいるところだった。

さてと、飯、飯。

そうして茶の間に入ると、

「おはよー、潤君！」

春奈がいた。

「うお！お前、まいど俺を朝限定で驚かせたいのか！？」

「えゝそんなことないよ。」

「嘘こけ。夜這いならぬ朝這いしたくせに。」

驚かせられた腹いせに反撃してみる。

「ちがうよ。あれは私じゃなくて……」

そこで少し顔を赤らめて、

「潤君が襲ってきたんだよ……。」

「へゝあんたそんなことしたんだ。」

「ぬあ！！！！」

突然背後からばあちゃんが顔を出した。

「春奈ちゃん、苦労したでしょう。口は達者でもあっちが役立たずだったとか。」

「あっち？」

「くおら！！！！あんた何口走ってんだ！！！！」

ばあちゃんが春奈をめくるめく18禁ワールドに誘い込もうとしてたところで叫んだ。

「ねえ幸さん、あっちって何ですか？」

「お前も知ろうとせんでいい！！！！」

バシッ！！！！

「あうっ！！！！」

俺は春奈に向かって、スーパーミラクルテクニカルブロークンマグナム（いわゆるデコピン）を放った。

「いったーい！デコピンはやめてよ。」

春奈は涙ながらに訴えてきた。

「ばあちゃんも勘違いすんな。俺が寝ぼけてただけだったの。」
「何だ、つまんないね。」

ばあちゃんは本気で残念がっていた。

くっ、このばあ。

いつか、見返してやろうと心に誓い朝飯を食った。

「ねえ幸さん、あっちって何ですか？」

「お前も知ろうとせんでいい！！！」

バシッ！！！！

「あうっ！！！」

俺は春奈に向かって、スーパーミラクルテクニカルブロークンマグナム（いわゆるデコピン）を放った。

「いったーい！デコピンはやめてよ。」

春奈は涙ながらに訴えてきた。

「ばあちゃんも勘違いすんな。俺が寝ぼけてただけだっつうの。」

「何だ、つまんないね。」

ばあちゃんは本気で残念がっていた。

くっ、このばあ。

いつか、見返してやろうと心に誓い朝飯を食った。

……………。
それから、ばあちゃんいじる、俺いじられる、それ見て春奈が爆笑している状況を繰り返していた。

そして俺の最後の日の時間は過ぎていった。

……………。

「さっ、潤。もう時間じゃないのかい？」

「あ、ああ。そうだな……。」

「……………」

俺と春奈とばあちゃんは家を出て駅へ向かった。

そして駅に着き、俺は最後の挨拶を済ます。

「じゃあ、俺もう行くわ。」

「ああ、元気でいなよ。」

「……………」

ばあちゃんは笑っていたが、春奈は黙って俯いたままだった。

「春奈。俺、絶対もう一度帰ってくるから。」

「うん……。待ってる……………」

とは言いながら、全然目も合わせようとしない。

ハア、しょうがないか……………。

「じゃあ、春奈。俺もう行くから。元気でな。」

「……………」

俺は振り向いて電車に乗ろうとしたが、

「潤君……!!」

「?」

それを聞いて振り返ったら、

「!!!!」

「んっ……………」

「ワーオ。」

俺の口が突然春奈の口で塞がれた。

ただ触れ合うだけの軽いキス。

だけど、それだけでも春奈の思いが伝わってきた。

そしてゆっくり春奈が離れていく。

そして顔を赤らめながらはにかんだように、

「えへへ、1年間も会えないからエネルギーの補給。」

「にしても、いきなりだな、おい。」

といいながらも、きつと俺の顔も真っ赤だな。

「私、ずっと、ずっと待ってるから。」

「ああ、1年で必ず答えを見つけて帰ってくる。」

「うん!」

その最高の笑顔に見送られながら、俺は電車に乗り込む。

そしてゆっくり走り出した。

俺は春奈が見えなくなるまで手を振り続けた。

じゃあな、春奈。

.....。

「行っちゃったね。」

「.....。」

あたしは肩を震わせているこの少女を強く抱きしめた。

「大丈夫。あいつはきっと帰ってくる。なんだかんだで約束は守るからね。それにあんたはずっとあたしの家族だよ。もう1人じゃない。」

「は.....い.....。」

.....。

さて、これからは大変だな。

答え、出せるのかな、俺.....。

いや！出さなきゃけないんだ！

そうだよな、美咲。

（完）

最終話 春奈の勇氣、潤の決意（後書き）

はい、中途半端なところで終わりましたけれども、それは第二章的なものにくからなのですよ。

美咲の正体やら、潤の過去やら、春奈が大胆な行動にでっちまうやらを書いていくつもりです。

では、第二章「春の訪れ」の方の応援もよろしくお願い致しますです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7538a/>

孤独からの救い

2010年10月11日05時03分発行